

樹心仏地——値遇と自覚——

本学教授 神 戸 和 磨

今日の講題は『教行信証』の中にあります「樹心仏地」というテーマです。昨年の七月に『清沢満之全集』（全九巻）を出版しましたが、私は第八巻の日記の解説を担当しました。その日記を読んでききますと、清沢先生の先輩であります井上田了、清沢満之、その他の東京へ行かれた人々が「樹心会」という会を作っています。また東京の浩浩洞には、佐々木月樵や暁烏敏等がみえます。ちょうど八畳ぐらいのところに清沢先生が住んでみえましたが、その自分の部屋の名を「樹心窟」と名付けてみえたのです。清沢先生は、この「樹心」という言葉を非常に大事にされたのではないかと思います。今日は親鸞聖人の『教行信証』に沿い、しばらく私の感じますことを尋ねさせていただきます。

先程レジュメを皆様方のお手元にお配りさせていただきましたが、『教行信証』の最後の方に、

慶ばしいかな、心を弘誓の仏地に樹て、念を難思の法海に流す。深く如来の矜哀を知りて、良に師教の恩厚を

仰ぐ。慶喜いよいよ至り、至孝いよいよ重し。これに因って、真宗の詮を鈔し、浄土の要を撫う。ただ仏恩の深きことを念じて、人倫の嘲を恥じず。もしこの書を見聞せん者、信順を因として疑謗を縁として、信樂を願力に彰し、妙果を安養に顕さんと。

とあります。そこに「心を弘誓の仏地に樹て、念を難思の法海に流す」というお言葉があります。『教行信証』の最後は、法然の仏教運動が弾圧を受けた「承元の法難」から書き出されています。それから二十九歳のときに「よきひと法然上人に出遇った」、よく知られる「建仁辛の酉の暦、雜行を棄てて本願に帰す」という回心の表白です。そして法然上人の『選択集』を书写すること、また法然上人のお姿を図画することが許されたことを示します。そのような文脈の中に「慶ばしいかな、心を弘誓の仏地に樹て、念を難思の法海に流す」ということがいわれます。そこにはたんなる喜ばしいということだけではなく、その前にこの法然上人との出遇いを「悲喜の涙を抑えて、由来の縁を註す」と示し、二十九歳から三十五歳まで法然上人のもとにみえますが、そのあいだ法然の仏教教団は顕密体制の旧仏教から弾圧を受けます。

また親鸞の求道は『恵信尼消息』によく示されます。一生懸命に道を求め、仏陀・世尊の教えに応答を求めるわけです。ところがそれが自身に響いてこない。「後世を祈る」という表現がありますが、一つの方向を仏陀・世尊の教えに問い尋ねていくのですが、自分が生きていく現実、生死のさまよい、迷悶の身に応答してこないという中によきひと法然上人に出遇い、そして法然の仏道の課題を担い歩いていくのです。そういう意味で『教行信証』は法然上人の『選択集』の課題、なぜ「ただ念仏して……信するほかに別の仔細なきなり」という信念、仏道の信念が弾圧を受けなければならぬのか、そういう問題があるといえます。

法然上人の教えの中で、親鸞聖人は以下の文だけを引用されているわけです。

『選択本願念仏集』源空集に云わく、南無阿弥陀仏 往生の業は念仏を本とす、と。

また云わく、それ速やかに生死を離れんと欲わば、二種の勝法の中に、しばらく聖道門を闔きて、選んで浄土門に入れ。浄土門に入らんと欲わば、正雜二行の中に、しばらくもろもろの雜行を抛ちて、選んで正行に帰すべし。正行を修せんと欲わば、正助二業の中に、なお助業を傍にして、選んで正定を専らすべし。正定の業とは、すなわちこれ仏の名を称するなり。称名は必ず生まるることを得、仏の本願に依るがゆえに、と。已上

あれだけよきひとを仰ぎ、尊敬された、その仏道の了解は、『選択本願念仏集』の題号と「題下の十四字」、「南無阿弥陀仏 往生の業は念仏を本とす」。そして『選択集』の一番最後に示されています「総結三選の文」の一文です。総結三選の文とは第一に聖道門・浄土門・聖・浄の選び、法門の選びです。それから二番目には、正行と雜行、行の選び、宗教実践の選びです。そして、「称名が正定の業だ」という生活指針で表されています。その三つの選びの中に念仏往生の道が「本願に依るがゆえに」ということで示されます。『選択集』からの引用はたったそれだけです。そしてその後に、宗祖のご自釈が、

明らかに知りぬ、これ凡聖自力の行にあらず。かるがゆえに不returnの行と名づくるなり。大小の聖人・重輕の悪人、みな同じく齊しく選択の大宝海に帰して、念仏成仏すべし。

と示されます。そこで注意されますのは、この不returnということ。無returnではない、不return（無要衆生、return）です。不returnは、returnの主体の転換です。「本願章」には、

阿弥陀如来、余行をもって往生の本願となさず。ただ念仏をもって、往生の本願となすの文。

といわれています。どこまでも人間を出発点とした余行・雜行、諸行というあり方でなしに、念仏をもって往生の本願とするということです。そのことは釈尊一代の教えを仏教の内部から、『法華經』が優れているとか、『華嚴經』が

優れているというような、そういう優劣論ではなく、どこまでも法然上人のなされたお仕事は、釈尊一代の教えを阿彌陀仏の選択、阿彌陀の法に人間が凝視され、人間が見直されていく本願の仏道です。ですから釈尊の教法を私たちの心、または人間の分別・理性から選ぶということではなく、どこまでも阿彌陀如来の選択というところに先程の「三つの選び」、そして「称名必得往生、依仏本願故」ということが一つの眼目になっているといえます。

そういう意味では法然上人の教えは、念仏往生の願、「一願建立」です。「念仏往生の願」、その一願を明らかにするということです。『歎異抄』でいいます、第二条の、

親鸞におきてはただ念仏して、弥陀にたすけられまいらずべし、よきひとのおおせをかぶりて、信ずるほかに別の仔細なきなり。

ということです。「ただ念仏して、……信ずる」というところの、「念仏往生の願」が柱です。ところが「ただ念仏して、……信ずる」といわれますけれども、そのことがなかなか受け止められないものが私たちの理性・分別にはあります。その前に「念仏往生の願」の第十八願がどういうふうに「本願章」では展開されているか。

法然の『選択集』では、ただたんに「念仏往生の願」が示されているのではなく、四つの願を示されます。一番初めは「無三悪趣の願」です。二番目は「不更悪趣の願」、三番目の「悉皆金色の願」、四番目の「無有好醜の願」、その四つを押さえて衆生が彼の国に生まるる行として「念仏往生の願」ということがいわれています。そういう意味ではこの四つの願文は、私たちの現実問題がおさえられているといえます。

「三悪趣」、地獄・餓鬼・畜生の現実の問題です。人間同志が傷つけ害し合う、そういう三悪趣の現実、三悪趣の痛みを超え出たい、そして再び悪趣へ返らないと。そこにはやはり人間が生きていく限り常にそれぞれが争いの世界を生きる、それが現実です。よく知られていますように熊谷直実が源平の戦の中で、十歳ぐらいの敦盛を敵の大將で

あるがゆえに殺さなければならなかった。自分にも同じ年頃の小次郎という子どもがいたのですが、なぜこういう人殺しということをしなければならなかったのかと、敦盛を殺してからやはり武士の性に泣くのです。そういう中に法然上人の教えを尋ねていくのです。

それから三番目の「悉皆金色の願」、みんなが金色に輝かなければならないという願があります。そういう平等の世界は、たんなる平等ということだけではなしに、好ましいとか醜いとか、常に差別を生み出していく現実、私たちの現実の問題です。一願・二願は争いの世界、三願・四願は差別の問題です。差別の問題といえますと、当時の仏教は、比叡山の一乗止観院ということ为例に取りましても、「一乗」という旗印は立てていますけれども、女人禁制です。また漁師も獵師も農民も遊女も、やはり僧堂の仏道においては疎外されていた民衆です。僧堂の教えというのは、やはり經典を読むには文字が読めなければならず、また最低の戒律を守ることが条件です。ですから文字の読めない人、また生活の為に生き物を殺している人は殺生罪業論として卑しめられていたと、『歎異抄』十三条はよく語っているところです。

「持戒持律にてのみ本願を信ずべくは、われらいかでか生死をはなるべきや」と。かかるあさましき身も、本願にあいたてまつりてこそ、げにほこれそうらえ。さればとて、身にそなえざらん悪業は、よもつくらわれそうられじものを。また、うみかわに、あみをひき、つりをして、世をわたるものも、野やまに、ししをかり、とりをとって、いのちをつぐともがらも、あきないをもし、田畠をつくりてすぐるひと、ただおなじことなり」と。

「さるべき業縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべし」と。

つまり直接生産に関わっている人、またイノシシを捕まえて生きている獵師、また魚とか田畑を作っている人、そういう人々は持戒持律を旨とする教えにおいては疎外されていたのです。ですから、一乗を旗印としているのですが

修道院仏教です。修行する者のみの悟りの道です。海川に網を引き、釣りをし、日々生産のために生きる人々は殺生罪だと、地獄に落ちるものだといわれていたのです。そういう中に先の一願、二願、三願、四願は当時の修道院仏教は一乗を旗印としながらも、現実においてはそういう求道というかたちをとりながらも一般民衆を疎外していたという現実が押さえられているのではないのでしょうか。

そういう中に「念仏往生の願」といいますのは、万人が平等に法蔵菩薩の平等の慈悲において救われていく道です。法然上人は『選択集』の終わりの方に、「濁世の目足」ということをいわれています。「濁世の目足」といいますのは、目は、方向です。そして足は、歩みです。つまり宗教的な実践です。民衆の中で生きていくことは、いろいろ問題を抱えて生きていかなければならないのですが、そういう中に阿弥陀の本願に呼び覚まされ、覚醒しつつ歩む道、称名念仏の道は仏願に乗託していく正定の業の道、歩みです。

それが先程からいっています不回向、五番の相對のところを示されます、不回向、つまり“無要衆、生回向”の回向の主体の転換があるといえるでしょう。回向・不回向對のところでは法然上人は、「たとひ回向をもちひずとも、自然に往生の業なる」といい、そして善導大師の「六字釈」を引用されます。ですから不回向ということは回向の主体の転換、親鸞の言葉でいえば如来回向の自覺のことです。不回向が何か無回向、菩提心無要と了解されたためいろいろ誤解が起こってくるのでしょうか。『選択集』をみたとき、明恵上人はこの法然上人のことを「悪魔の使いだ」といい、本當の仏説を明らかにするのではなしに「悪魔の使いではないか」ということをいわれた。そういう誤解が法然の仏道の事業、仏教運動に対しての弾圧になってくるのです。それが承元の法難、嘉禄の法難です。しかし別に法然上人は菩提心を否定しているわけではないのです。『選択集』の第十二章「念仏付嘱章」のところでは「人皆おもえらく、菩提心は是れ淨土の綱要なり。若し菩提心なくば、即ち往生すべからず」という文があります。法然上人の菩提心の

問題は、自力において菩提の道を求めていくのですが、それが成就しないという背反・苦悩の中での懺悔を通して、弥陀の本願に帰していかれた。そういう苦悩としてよく知られますのは、『和語灯録』の「戒定慧の三学のうつわにあらず」という廻心の表白です。また、「まことにこの身は道心無きこと病ばかりと嘆きたり」、自分自身は道を求めるのですけれども本当に道心がない、かえって精進して歩むその道をおろそかにしてしまう病の身であるという表白にても知られます。

そういう意味でやはり不回向とは、回向の転換です。阿弥陀如来の選択における願心の目覚め、信心はどこで成り立つかということです。それは『歎異抄』の後序等を思い起こしていただければ一番わかりやすいわけです。法然上人と親鸞聖人、その門弟の話の中に「智恵才覚においては違いがあるけれども、往生の信心においては一つだ」ということがいわれています。「法において一つだ」ということはすぐわかりますが、「信心同一」、「往生の信心において一つ」ということはなかなか了解できません。法然は法然の業を生きている。親鸞は親鸞の宿業を生きている。その目覚めの信心が一つだということです。そういうところに法然上人においては不回向といわれている事柄が、親鸞聖人においては、「選択本願の行信」、「如来回向の信心」と押さえられます。

ですから法然上人においては先ほどから何度も繰り返していますが、「一願建立」の仏道、如来の根本の願い・根本の要求として「念仏往生の願」が明らかにされます。『教行信証』になりますと「一願建立」が「二願分相」という内容になります。一つの願いが二つの願いにおいて明らかにされます。行巻における「諸仏称名の願」、そして信巻の別序に「至心信樂の願 正定聚の機」と示されます。

そのことは『選択集』に『往生礼讃』を引意して、

弥陀世尊、もと深重の誓願、光明名号をもつて十方を摂化したまう。ただ信心をして求念す。上尽一形、下至十

声・一声等、仏願力をもつて易く往生を得る。

とあります。「上尽一形」は一生涯ということです。上は一生涯、下は十声、また一声、仏願力をもつて往生を得るということがいわれています。この点は、『西方指南鈔』にも尋ねられています。そこには「信において一念に生まる。行をば一形に励むべし（一生涯励むべし）」とあり、信は本願の目覚めであり、行は正定業の生涯の相續です。信と行は切り離されるものではなくて、「行信不二の自覚」です。

それがいつの間にか人間の分別領域に捉えられていくのです。一念で（二声で）往生するか、多念でなければならぬと分別されていくのです。これは法然上人のお姿をみていれば、毎日七万遍念仏をしたといわれていますので四六時中（七万遍という二十二時間ぐらいかかります）念仏をしていたことが知られます。そういうこともあつて念仏申すということが数量化されていくのでしょう。親鸞聖人の御消息の中にも一念義・多念義ということがいわれます。そのように念仏が数量化されていくことは称名念仏が人間の意識行為として捉えられていくといつていいでしょう。この一声でいいのか、或いは多く唱えた方が功德があるのか、そういう数量化されていくという問題があるのです。そこには第十八の願文の「聞其名号、信心歡喜、乃至一念、至心回向、願生彼国、即得往生、住不退転」（本願章）そして第二十の願文「聞我名号、係念我国、植諸徳本、至心回向、欲生我国、不果遂者、不取正覚」の「至心回向」が重なり未分になっているといえます。未分の行の一念、信の一念になっているといえます。

法然は「利益章」に、

「一念」というのは、これ上の念仏の願成就（第十八願成就文）のなかにいうところの一念を指す。願成就文のなかに一念というといえども、いまだ功德の大利を説かず。この（流通分）の一念に至りて、説きて大利となし、歎（ほ）めて無上となす。まさに知るべし。

というように弥勒付属の行の一念に眼目がおかれています。

そういうところに、「至心回向シテ乃至一念マデモ……」という、そこには二十願文と重なった了解があるといえます。そして宗祖の場合は、「至心回向シタマエリ」という仏道了解です。

第十八願成就文を「本願信心の願成就文」

諸有衆生、その名号を聞きて信心歓喜せんこと、乃至一念せん、

と区切り、そして、「本願の欲生心成就の文」、

至心回向したまえり。かの国に生まれんと願すればすなわち往生を得て、不退転に住せん、

と了解されていきます。

そこには「諸仏称名の願 選択本願の行
浄土真実の行

大行者則称無碍光如来名

諸仏、よき人の発遣、称名とは一如の功德、如来の功德を讃える「讃嘆」の行です。つまり、仏（法）の位といえます。

聞其名号信心歓喜乃至一念、至心回向、願生彼国

衆生（機）の“無量寿仏の威神功德の不可思議”なる讃嘆、つまり、よき人の教示される一如、如来の功德を聞き、呼び醒まされる聞名、「聞名」（機）の位が明らかにされてきます。『教行信証』においては第十七願、第十八願、第二十願の問題が展開されてきますが、いまは問題点を示すのみにとどめさせていただきます。

大行釈のはじめに、

謹んで往相の回向を案ずるに、大行あり、大信あり。大行とは、すなわち無碍光如来の名を称するなり。

そして「み名を称する」とは、「真如一実の功德宝海」、つまり仏陀の目覚めた真如一実の功德の宝海を開示してくる、といわれている。そしてさらに、親鸞聖人のご自釈が終わったところに「因願の文」、「成就の文」が示されます。

諸仏称名の願、

『大経』に言わく、設い我仏を得たらんに、十方世界の無量の諸仏、ことごとく咨嗟して我名を称せずは、正覺を取らじ、と。已上

と。続いて「重誓偈」の文、願成就の文が引かれます。

願成就の文、『経』に言わく、十方恒沙の諸仏如来、みな共に無量寿仏の威神功德不可思議なるを讃嘆したまう。已上

と。

我が阿弥陀の名を咨嗟して（ほめて）ほしいといい、また無量寿仏の威神功德不可思議なるを讃嘆してほしいと示すのです。これが第十七願の内容です。そこには先程いきましたように称名念仏がとすると人間の意識行為、人間のひとつの行為として、一念でよいのか、多念でなければならないのか、そういう混乱の中に陥りがちですが、称名念仏はよき人、目覚めた人の發遣、呼びかけです。發遣を通した招喚、阿弥陀の招喚です。ですから「無量寿仏の威神功德不可思議なるを讃嘆せよ」とあります。それは、仏陀みずからが目覚めた法界です。つまり、「法界の名乗り」、如来内存在に目覚めた人の讃嘆です。或いは弥陀の本願の回向表現です。しかし、その回向表現は、人間の意識行為からとらえようとするものではないのです。私たちの日常的な関心は、経済的な関心とか、政治的な関心とか、合理的な関心とか、日々そういういろいろな関心の中に生きておりますけれど、やはりこの「法界からの名乗り」、回向表現は三界を超えた浄土からの表現、名乗りですから全く異質性があるわけです。人間の意識、行為の延長として描

かれるものではないということです。

そういうことを最もよく表していますのが「重誓偈」です。「因願の文」と「成就の文」のあいだにある文です。『大無量寿経』でいいますと、法蔵比丘が世自在王仏を讃嘆する、「嘆仏偈」です。それは法蔵が世自在王仏を讃嘆し、その志願に生きようという信の表明です。そして四十八願が展開されてきます。四十八願が終わりますところに「重誓偈」・「三誓偈」が示されます。

また言わく、

我、仏道を成るに至りて、名声十方に超えん。

究竟して聞ゆるところなくは、誓う、正覚を成らじ。

(中略)

衆のために法蔵を開きて、広く功德の宝を施せん。

常に大衆の中にして、説法を師子吼せん。

と。この「重誓偈」といいますのは、三つ誓に四十八願が集約され示されています。

我、超世の願を建つ、必ず無上道に至らん、

この願満足せずは、誓う、正覚を成らじ。

これが第一の誓いです。それから

我、無量劫において、大施主となりて

普くもろもろの貧苦を濟わずは、誓う、正覚を成らじ。

我、仏道を成るに至りて、名声十方に超えん。

究竟して聞ゆるところなくは、誓う、正覚を成らじ。

衆のために法蔵を開きて、広く功德の宝を施せん。

常に大衆の中にして、法を説きて師子吼せん。

といわれています。初めの第一の誓いは、「超世の願」、世を超えた願い、すべての衆生を無上道に至らしめようという願いです。これは四十八願全体をあらわしています。仏の自利の願いです。それから第二の誓いは「大施主」、大きな施主となって貧苦（この場合の「貧苦」と申しますのは人間の精神的な闇、無明性でしょう）を救いたいという願いです。つまり自我を中心として傷つけ合い、害し合う世界を生きる、その「貧苦を濟わずは、誓う、正覚を成らじ」という仏の利他の願いです。そして第三の誓いは、「我、仏道を成るに至りて、名声十方に超えん。究竟して聞ゆるところなくは、誓う、正覚を成らじ。」と、第十七願の仏の名声、仏の誓い、魂のさげび、つまり名となつて呼び醒ます如来の願心の表現です。

以前、阿部謹也氏が『世間』という新書本を出されました。日本の『方丈記』などの記述を通して「世間」ということを書かれてみました。そこで仏教では「世間」をどのように見ているのか。私は『仏教学辞典』（法蔵館）を引きました。その頃には、『仏性論』により世間を、「対治、不静、虚妄」という内容で示している。いまだいえば、アメリカ・イラクにしても、また親鸞の時代でいえば源平にしても、対立し統治し、また亡ぼし滅し合う。それから不静、自分の人生は自分一人で生きているのではない。業縁、関係性の中に生きている。一人静かにあるうとしても、業縁の中を生きていかなければならない。それからもうひとつは虚妄です。うそ・偽り、だまし合い、虚妄の世界を生きている。超世、世を超えた法界から私たちを目覚めます、そういうことが法界の回向表現の名乗りです。そういう点からみても「本願の名号」・「名声、名号の名乗り」は、人間の意識行為とはまったく異質であり、人間の行為の連続

の中で考えられるものではない。そういうところに人間の行為の一念で助かるか、多念で助かるかという、問題ではない。

例えばそういう本願の「法界の名乗り」というかたちの意味は、『選択集』の最後のところに念仏の行の目覚めとして示されています。それは「水月を感じるに、しかも昇降を得たり」という。念仏の行は水に月を感じ、しかも昇降を得たりという。なにか「清浄無漏の世界」といいますとこちらからお月さんに梯子をかけ登っていくように考える。清浄になろうと、無漏になろうと、人間の行為から求めていくあり方だと思いがちです。ところがそうではなく、この地上、水面に月は映る。昇ったり降りたりすることでない。お月さんはそれこそ水面に映る、清い水であらうと、濁った水であらうと、バケツの水であらうと、その清浄の月が映るといいます。

そういう内容が示されているわけでして、行巻におきましては「諸仏称名の願」を通して、「大行」というのは、無碍光如来のみ名を称するなり」といいます。そして「み名を称する」ということは、「称名は一切衆生の無明を破し、衆生一切の志願を満たす」、一如法界の生命の根元に私たちの自我分別心を翻えし目覚ましめる。つまり、「一乗海」の生命の故郷に目覚ましめるのです。

海と言うのは、久遠よりこのかた、凡聖所修の雑修雑善の川水を転じ、逆謗闡提恒沙無明の海水を転じて、本願大悲智慧真実恒沙万徳の大宝海水と成る、これを海のごとくに喩うるなり。良に知りぬ、経に説きて「煩惱の水解けて功德の水と成る」と言えるがごとし。已上

願海は二乗雑善の屍骸を宿さず。いかにいわんや、人天の虚仮邪偽の善業、雑毒雑心の屍骸を宿さんや。

どこまでも仏道に背く、仏法に反逆した自我分別を中心とした私たち、つまり、「逆謗闡提恒沙無明の海水を転ず」というはたらきです。

そこに阿弥陀の本願を讃嘆する名号は、私たちの生活の中で「至心信樂の願 正定聚の機」の自証、自覺を得る。それは信巻に一貫しています「疑蓋無雜の一心」の目覚めです。念仏といひましても、「はい、そうですか」といつて受け止められるものではない。そこには廻心、自力心を中心としたあり方が転換するということです。やはり疑ということがあり、本願を信じるといってもなかなか受け止められないという問題があります。曾我先生の『信疑論』の一文の中で、「疑は信仰の敵であるが、また信仰の母である。信を産み出す母である」とあります。やはり疑いをくぐるということを通して本願に目覚め、覚知していくのです。それが信巻では、「三心一心の問答」、或いは化身土巻には「仮令の誓願、良に由あるかな」、「果遂の誓い、良に由あるかな」と、十九願、二十願の問題がいわれているでしょう。やはり疑いをくぐるという中に「疑蓋無雜の一心」、本願に帰し、本願に生きるといふ新しい命、新しい主体を得た歩みが始まるのです。

信巻の「三心一心の問答」、「仏意釈」です。そこに、

仏意測り難し、しかりといえども竊かにこの心を推するに、一切の群生海、無始よりこのかた乃至今日今時に至るまで、穢惡汚染にして、清淨の心なし。虚仮諂偽にして真実の心なし。ここをもつて如来、一切苦悩の衆生海を悲憫して、(以下略)

と、ずうっと続いています。次の「信樂釈」でも、「一切群生海」と、そして、

一切凡小、一切の中に、貪愛の心常によく善心を汚し、瞋憎の心常によく法財を焼く。急作急修して頭燃を灸うがごとくすれども、すべて「雜毒・雜修の善」と名づく。

とあります。それから「欲生釈」のところでも同じように、

一切苦悩の群生海を矜愛して、

と、どこまでも「欲生」は衆生の彷徨う・苦悩する「諸有の群生を招喚したまうの勅命なり」といわれています。至徳の尊号を体とした「至心信樂欲生」の如来の願心と修行、それは兆載永劫の修行、歩みです。つねに欲求不満、あれがあつたらこれがあつたらと満たされることない、右往左往している衆生を「如宝海の功德」、生命の根元に呼び起こし、私たちのさ迷いを掘り起こし、根元の願いへ帰らせるのです。そこでの「一切群生海」といいますと、何か非常に平面的にみえます。いろいろなものが、生きとし生けるものが群がっているように考えますが、曾我量深は『如来表現の範疇としての三心観』という論文の中で「群生海は二河の譬喩に示される群賊悪獣だ」といわれています。「群賊悪獣」といいましてもどこかにいるものではありません。『愚禿鈔』には、

群賊は、別解・別行・異見・異執・悪見・邪心・定散自力の心なり。

といい、それから、

悪獣は、六根・六識・六塵・五陰・四大なり。

といわれます。私たちはいろいろな考え・見解の中に、ぶつかり合い・いがみ合い、またそのたびに人を殺すというような問題があります。それが群賊です。それから悪獣の場合は、六根・六識・六塵・五陰・四大で人間の心理作用、分別心です。自然法爾の因縁所生の中にありながら、自己の意識、その自我の意識は常に対象領域を設定し、そして自然とか環境、そういうものを自分の都合のいいように作り変えていくものを持っているわけでしょう。特に仏教では識・唯識といえます。養老孟司さんは「唯脳論」といわれますが、仏教では「唯識論」です。脳には形があります。意識、八識には形がない。その点を押さえます。末那識・阿頼耶識、その「末那識」というところには我癡・我愛・我慢・我見という深い自我の迷い、精神の暗い闇があります。親鸞は、

自力というは、わがみをたのみ、わがころをたのみ、わがちからをはげみ、わがさまざまの善根をたのみと

なり。

と自力心を押さえています。深い意識の根底のところに、私たちは自然内存在としてありながらも、我が命、我が人生、我が身とすべてを私有化していくわけでしょう。私の命だから私の思うようになって当たり前だと、私の勝手になって当たり前だと、すべてを我癡・我愛・我慢・我見によって受け取ります。つまり阿頼耶識は藏識ですからいろいろな経験を蓄積して生きているということです。

その異学、異見の私たちの解釈、自我意識、私たちの自我意識は、善悪のはからいですから、常に相手を敵にし、味方にし生きていくわけでしょう。そしてそこに傷つけ合い、殺し合う現実があります。だから「一切群生海」というのは、何か平面的なかたちで何かが群がっていることではなしに、我々の生きている現実には群賊悪獣、清沢の言葉でいえば「敵対万物の妄情」に転落していくのです。そういう中に仏の魂・如来の願心、欲生心の目覚めを名号が呼び起こしてくる歩み、一如宝海の根元の願い、命に目覚めさせる兆載永劫の修行です。本願の名号、「如来の願心」は生命の故郷を見失って生き続けていく、そういう一切群生海を場所として、どこまで「至心信樂欲生我國」の如来の願心、勅命に目覚ましめ、願生道を歩ませる。そういう意味で称名は諸仏の讃嘆する法界の名乗りです。親鸞の了解でいえば、先に述べたように讃嘆、聞名の位が明らかにされたといえます。「聞其名号信心歡喜」といわれるように彷徨う人生の中にみ名を聞く、讃嘆と聞名、そこに願生道を歩む、み名に呼び醒まされ歩む道です。

「樹心仏地」ということで考えさせていただいたのですが、十分意を尽くしませんが、時間もまいりましたので、私の話はこれで終わりにさせていただきます。

〈キーワード〉よきひとの仰せ、選択本願の行信、願生の仏道